

微妙公御代伴八矢江戸にて、今日は河内殿へ行と家來へ申聞、駕籠に乗候てねぶりて居申内、河内殿門前のよしにて、駕籠昇据候へば目覺め罷出、扱も大なる屋敷に成候。いつよりか様に成しなど存、式臺にて名乗候へば書院へ通し候。其後河内守殿被出、何ぞ御用にて被出候哉と被申候。其時井上河内守殿なる事を知て驚き、今日は私朋輩奥村河内と申もの、御當地に罷在候に付、それへ罷越候旨家來へ申聞、乗物の中にてねぶり居候へば、御門前にて乗物を下し候。河内守様と申に付、奥村方と存通り候へば相違に御座候。ふつゝか成事迷惑の旨申候。河州聞被申候て、何が有まじき事にもなく候。幸隙に居候間、咄被申候へとあれは、忝奉存候へども、奥村方にも致約束置候間待可申候。罷越度とありければ、いやゝ其儀は是より斷に使を遣し可申候。返し申事にては無之とて料理を被出、物語ども有之候て歸り申されしと。夫より後は心安く被申通候とぞ。

一、青木主計頭富士の詠歌

青木主計頭は肥前州長崎諏訪の神職也。其家の奥義を極め歌學も嗜めり。國々を経歴し我賀州へも來り、白山へも登

りぬ。大和州に到り安閑天皇の陵の邊に往て、所のものに珍敷事もなきやと尋ぬれば、さればとて申けるは、或もの安閑天皇の陵を掘あばき候。是は御棺を朱にてつめ申事を聞て、其朱を可取ため也。則掘出し朱を取候其跡へ、我行てみければ、か様の物有之候とて、瑪瑙にて製する天目を一ツ取出しませ申候。又太刀一振有之、是をも見せ申候。目利に見せ候へば、天國などにも可有之哉と申よしに候。

愚曰。天國作にて可有之哉と云事可笑。安閑帝の時代可考知事也。

此時分は劔にて可有之處、太刀の儀怪しき事に存じ、近衛殿へ主計頭其事申上候へば御不審がりにて、御家の舊記ども御考被成候處、神武天皇東征の時、宇摩志麻治命みづから劔を抜拂ひ、ふりあげ給ふ時、御眉の上にあたつて傷つき給ふ故、手づから石にあて片刃をすりおとし給ふといふ事見えたり。されば是より太刀は起れるなるべしと也。諸州の名所舊蹟を見めぐり、異なる事を尋ね探る事をなん好み。富士へも上りけり。絶頂へのほり歌よみぬ。

ふじの根を登れば雲をしきたへの枕に結ぶ草の葉もなし

古今士峰の詠無限けれども、多くは想像の詠也。主計みづからのぼりての吟詠、誠にさもありぬべし。

愚曰。士峯の詠、誠にかたき事になん。今茲の秋三條西宰相殿公關東御下向の時、富士の詠ありしか共、御心に不叶よしにて人に示し給はず。然るに西轅の期に臨んで、山本基庸にしめし給ふとぞ。其歌に、

雲もなく晴たる秋の半空に白きを見れば雪のふじの根  
余おもへらく。此歌しるきを見ればとの意しかとそのせん聞えがたき様に侍り。御秀歌と可申哉如何と存候處、是より先京都地下の人、梅月堂定阿となん聞えし者の歌に、

山々はまだあけやらぬ雲の上にしるきを見れば雪のふじの根

此歌のさま勝れるやうに覺え侍り。下の句の同じ様なる事は、偶然として同句よみ出せらるゝものなるべし。又仙洞御製に、

かたりつぎいひつぐやたが及ぶべき言の葉もなきふじの高根を

近衛太閤

ふりつみし神世おもふも久かたの國の光のふじの白雪  
右三十九則の話は、我僚友富永君金昌、嘗て聞おける物語をなん手集し、余に授けて觀せしむ。余閱覽の後其記事の詳細不易獲ことを嘉尚し、自ら手寫し取、且其事に類せる佳話の猶未及筆記事どもは、幸に附録しぬ。其本條を亂さざらん事をおもひて一段をひくくし、愚曰の二字を以て細書し、乃我所集の可觀小説の内へ入れぬ。金昌其辭の拙きを慮りてや、他見の無からん事を欲せり。其心を用ふる懇懃たりといへ共、然れども言葉の巧拙は何の可厭事ならん哉。故にこゝに記して後昆に傳るものならし。

享保三年戊戌蒞月十八日浚新齋禮幹手記于東都寓居